文化財学習会

ふ　る　さ　と　探　訪

テーマ　国分八幡と如意輪寺公園のオニバス
を訪ねる

講　師　渡邊 誠（高松市教育委員会文化財専門員）

平成２２年８月２２日（日）

共　催　高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

国分八幡と如意輪寺公園のオニバスを訪ねる

はじめに

今回のふるさと探訪はＪＲ国分駅を出発し、四国霊場八十番札所白牛山国分寺、特別史跡讃岐国分寺跡、国分八幡宮、田宮坊太郎の墓、如意輪寺、如意輪寺公園を廻る国分寺町国分地区を歩くコースです。この地域は旧石器時代から人々を見守ってきた国分台が悠久のときを伝え、また讃岐の仏教文化の発信地として古くから讃岐国分寺とともに歴史を重ねてきた地域でもあります。

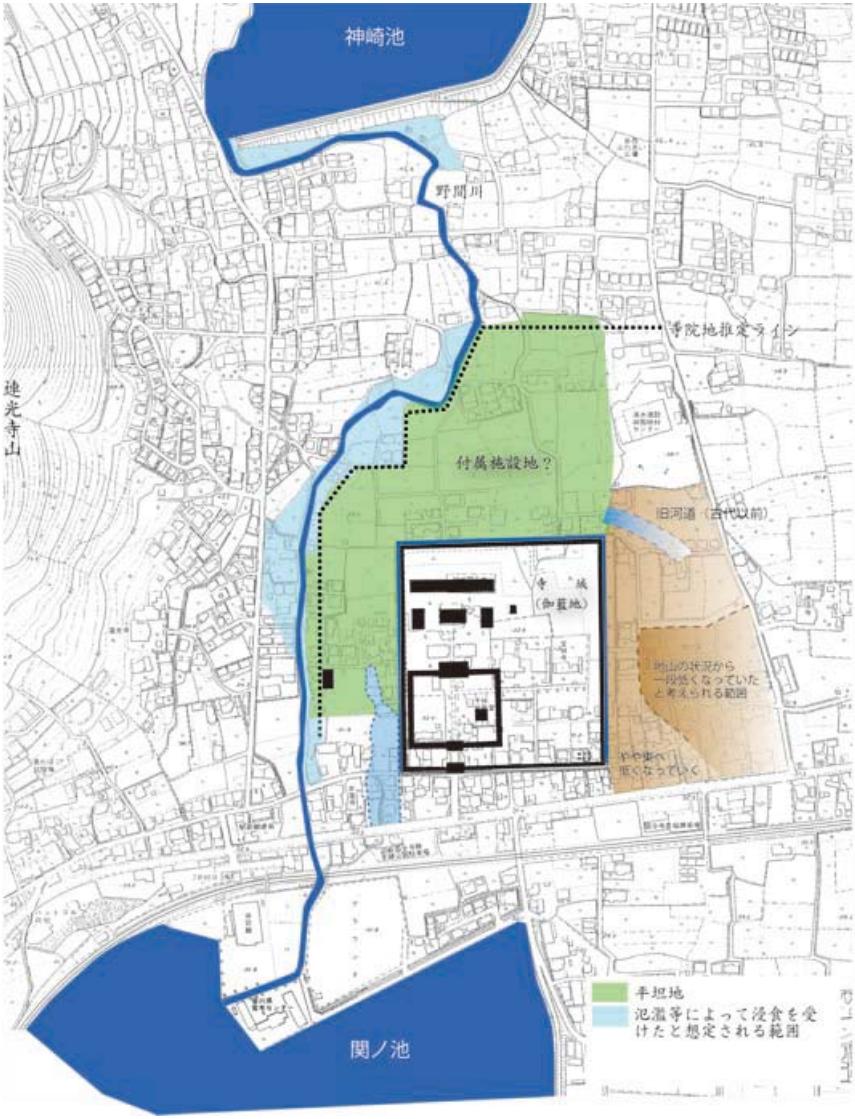
1　四国霊場八十番札所　白牛山国分寺

四国霊場八十番札所である国分寺は奈良時代に聖武天皇の勅命によって創建され、それ以後さまざまに形をかえながら、現代まで法灯を守り続ける香川県内でも屈指の寺院です。現在は仁和寺を総本山としていますが、文献記録から中世には、大和西大寺の末寺となっていたようです。

境内には創建時の面影を残す金堂跡や塔跡の礎石、その塔の心礎の上に作られた中世の石造物、重要文化財である本堂、銅鐘、千手観音立像などこれまでの歴史を示す数多くの文化財が残されており、歴史を感じさせる境内の佇まいは天平の昔を我々に思いおこさせてくれます。

2 特別史跡讃岐国分寺跡（とくべつしせきさぬきこくぶんじあと）

（昭和３年に史跡指定・昭和２７年に特別史跡）



讃岐国分寺跡の周辺地形

特別史跡讃岐国分寺跡は高松市国分寺町の北西部に位置し、県道３３号線沿いに所在しています。昭和３年に国の史跡に指定された後、昭和２７年に特別史跡に格上げされました。

讃岐国分寺は、国分台から延びる扇状地の先端に位置し、南には南海道が走り、北東に国分尼寺、南西に国府が所在するなど、国家的施設が集中する讃岐国の中心的地域であったと考えられます。

本格的な発掘調査は、昭和５２年から平成３年にかけて実施され、特別史跡を裏付ける成果が上がりました。この調査によって、伽藍地は東西２２０ｍ、南北２４０ｍの範囲とされ、当時の方２町の規模となることが分かりました。周囲は築地塀によって区画され、白と朱で彩られた建物群の様子は当時の人々には異様な景色として映っていたかもしれません。伽藍配置と言われる建物配置は奈良の大官大寺と類似していることが分かっています。

僧房跡

この一連の発掘調査の中で最も際立った成果は、僧房跡の調査でした。僧房跡周辺は、昭和１０年代頃から礎石の存在が指摘されており、調査前から注目を集めていました。

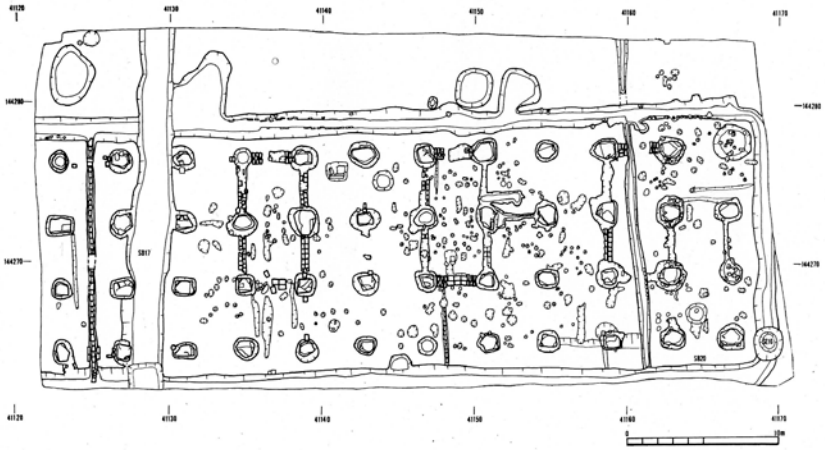
讃岐国分寺跡全景（北から）

発掘された僧房跡全景（北から）

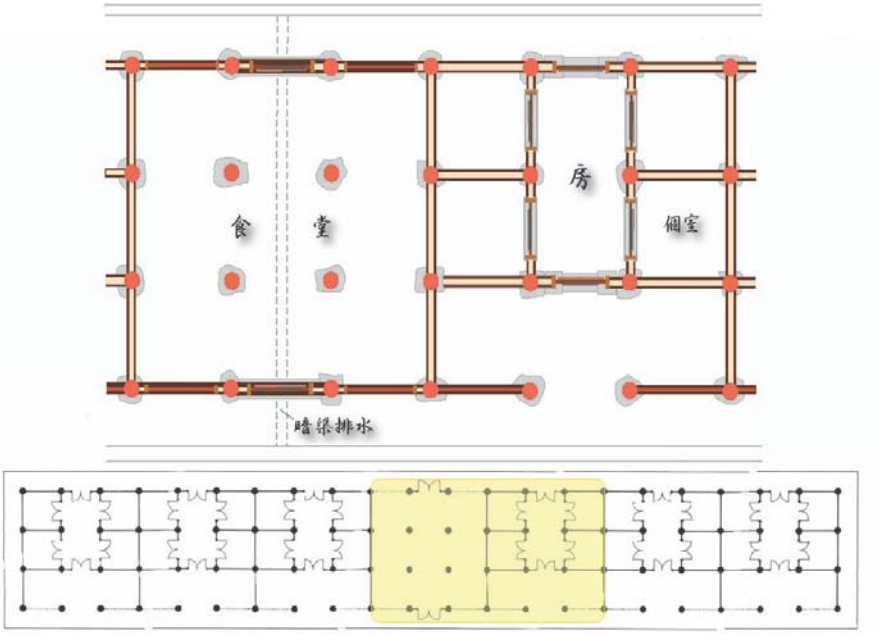
調査が始まると期待通りに礎石が顔を見せ始めましたが、その数は予想以上に多く、礎石の間には切石や塼（せん）によって設（しつら）えられた柱間の構造材が規則的に並んでいることが分かりました。この柱間構造と呼ばれる上部構造を復元する上で非常に重要な部材も出土しました。このように礎石だけでなく柱間構造までもが良好な形で残っていたような事例は全国でも珍しく、奈良時代に建築された僧房の間取りを復元することができました。僧房は、この構造材から、通路を挟んで東西に４メートル四方の部屋２つずつ配置された房と呼ばれる三間四方を１単位とする空間で仕切られていることが分かりました。この房は食堂と考えられる空間を中心に東西に各３つ配置されており、個室は４×３×２で計２４部屋あったことも分かりました。

この部屋数は国分寺に配置された僧の数が２０人であったという記述と一致するもので、書物に残された国分寺に関わる記載を裏付けたことになります。ちなみに残りの４つの部屋は都や他の寺院から国分寺を訪れた僧侶たちの予備用の部屋と考えられています。最終的に僧房の規模は東西８２メートル、南北１２メートルにも及ぶこととなりました。現在、僧房覆屋で目にすることができる礎石は当時のものそのものです。

僧房を訪れると、僧侶がきっとあなたを出迎えてくれるはずです。



僧房の平面図



復元された僧房の間取り

3　国分八幡宮

社記によれば天平勝宝元年（７４９）、参議石川朝臣年足、侍従藤原魚名（ふじわらうおな）によって創祀されたとされています。また、『日本名勝図会』によれば、江戸時代には岩川八幡宮と呼ばれていたようで、当時は久安２年（１１４６）に勧請されたと認識されていたようです。森口中西というものが山城国男山の宮を詣で、現在の大石の下に神体を勧請したのがその始まりとされています。天正年間（１５７３～９２）に長宗我部の進出によって兵火にかかり焼失したとされています。その後、生駒親正が関ノ池の築造にあたり、当社殿を再興しています。二代一正は鳥居を奉納し、高俊は大地震で荒廃した本殿を復興しています。

現在の本殿は昭和天皇即位５０年記念事業として新築されたものです。本殿の奥には磐座があります。また、馬場先に大門という場所があり、田宮坊太郎（小太郎）が仇討ちを果たした場所と言い伝えが残っています。

4　田宮坊太郎の墓

田宮坊太郎は、江戸時代初期の剣豪で父の仇討ちをし、孝子の手本として全国で有名となり、わが国の仇討ち物語の一つとして名をあげたと言われています。

その田宮坊太郎物語が作品になったのは、１８世紀に上演された歌舞伎「金毘羅御利生幼稚子敵討」が最初だと言われています。これをもとに浄瑠璃「金毘羅御利生敵討稚物語」が上演され、その後も、この物語を題材にした歌舞伎や浄瑠璃が繰り返し上演されました。金刀比羅宮の金毘羅大芝居でもしばしば上演され、近代にも映画化されています。ただし、この物語は史実ではないとする江戸時代の記載もあり、坊太郎に関わる古跡が跡付けで作られた可能性もあるようです。しかし、いずれにしても江戸時代に有名な物語であったことはまぎれもない事実です。

彼の詳細な履歴はわかりませんが、物語によって、整理すると次のようになります。

讃岐国丸亀藩士で、剣道指南役であった父・源八郎が同じ藩の森口源太左衛門（げんたざえもん）に彼の仕官の妬みから、闇討ちされてしまいます。その時、源八郎の妻のおなかには彼の子供、坊太郎がいました。父の亡き後生まれた坊太郎は寺に預けられます。歌舞伎や浄瑠璃によればこの寺は志度寺とされ、坊太郎は乳母のお辻とともに預けられたとされています。

その後、７歳で父の死の話を聞かされ、仇討ちを決心した坊太郎は、土屋に連れられ江戸に行き、柳生飛騨守に弟子入りして新陰流の剣を学びます。そして、免許皆伝した１７歳の時に丸亀の北山八幡社の境内で仇を討ったと言われています。

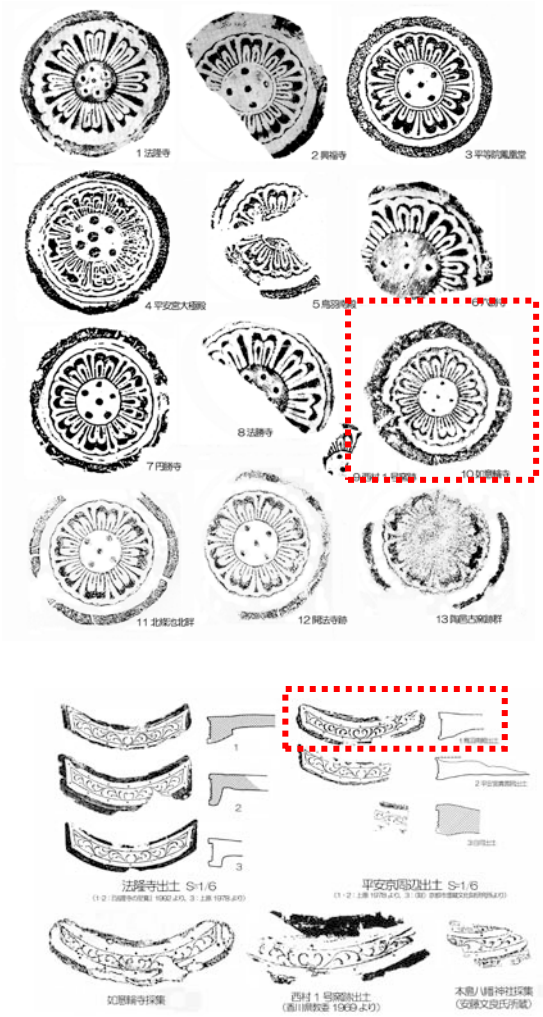
若くして病没したとも、東京都上野の寛永寺塔頭寒松院にも墓碑があることからここで自刃したとも言われていますが、詳細はわかりません。現在、丸亀市玄要寺には坊太郎の墓とされる朽ち果てた五輪塔が残されています。

ただ、なぜ国分八幡宮の南東斜面に田宮坊太郎の墓があるのかはよく分かっていません。

5　如意輪寺と如意輪寺窯跡

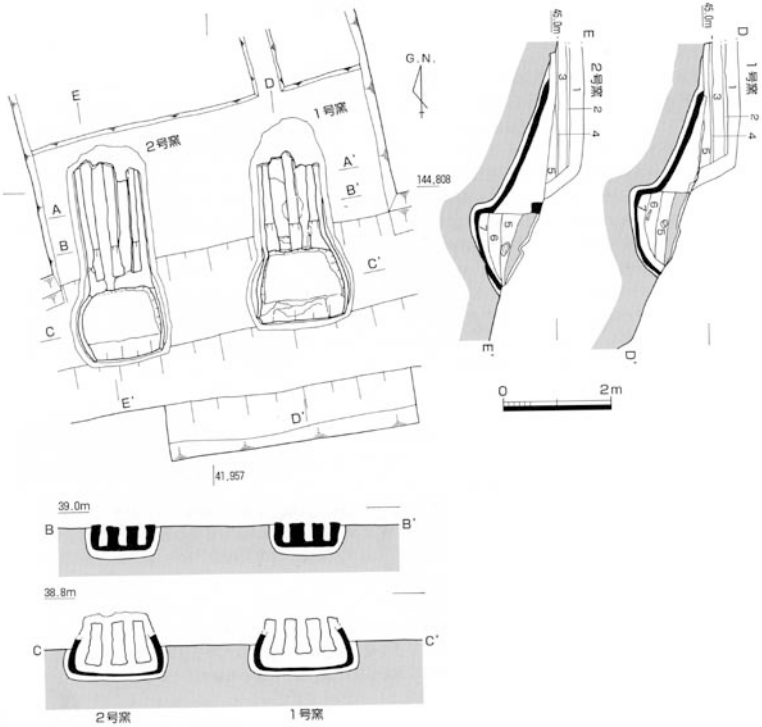
如意輪寺は、国分寺の末寺で、天正年間にはその関係から退転しています。現在は無住で、その建物も朽ち果てており、ある種の歴史を感じさせます。

如意輪寺の境内周辺では軒瓦が採集されており、それらはいずれも平安時代末期のものです。近隣の如意輪寺公園の整備事業の際に瓦窯２基が発見され、出土した瓦などから、これらの窯跡は如意輪寺付属の瓦窯と考えられ、平安時代末（１１世紀末）頃に創建された可能性が高いことが



如意輪寺出土瓦と同文瓦

明らかになりました。創建の経緯などはわかりませんが、国分寺、鷲峰寺（じゅうぶじ）とともに古い歴史をもつ国分寺地域を代表する寺院であることは間違いありません。



6　如意輪寺のヤブツバキ

如意輪寺の境内にあるヤブツバキは常緑広葉樹で、日本の代表的な野生種のものとは異なり、交配種ではないかとも言われています。です。ヤブツバキは、幹の根元から複数の枝に分かれて大きく枝を広げています。彼岸頃に深紅の花を咲かせます。

近年は周辺環境の変化などによって樹勢が衰えています。合併以後、樹勢をとりもどすべく、「ＮＰＯかみは」の方々の支援で、土壌改良や栄養剤の注入など、様々な方法が試みられてきましたが、樹勢の回復には至っていません。

7　如意輪寺公園とオニバス

如意輪寺公園は国分台から南東にのびる尾根の麓に位置し、国分寺町を見渡す絶好のロケーションにあり、市民の憩いの場として親しまれています。公園整備時には山越池の北岸で先の如意輪寺窯跡が発見され、現地で保存されています。

公園内の修景池にはオニバスが繁茂し、美しい花を咲かせます。オニバスは一年生の水生植物で、浮水性の水草です。夏ごろに巨大な葉を水面に広げます。全体に棘が生えており、オニの名がつけられています。特に葉の

表裏は硬く鋭く基本的には水中での閉鎖花が多く、紫の花を咲かす場合もあります。

種子は翌年に発芽するとは限らず、また、自生地の状態によって花の開花も左右されることが知られており、一般的に多数見られる年とそうでない年とがあることが知られています。

【参考文献】

角川書店一九八一『日本名所風俗図会』四国の巻

国分寺町一九七五『国分寺町史』

国分寺町一九七六『国分寺町史』補遺

国分寺町二〇〇五『さぬき国分寺町誌』

高松市教育委員会二〇〇七『特別史跡讃岐国分寺跡　如意輪寺窯跡　国分中西遺跡　兎子山遺跡』